



グローバル人材について考える

関高校は、グローバル人材育成を目標に掲げるスーパーグローバルハイスクールです。関高校はいったい何をめざすのか。そもそもグローバル人材とは何なのか。以下、紹介したいと思います。

Q グローバル化、グローバル社会って、何ですか。

A グローブ (globe) とは、もともと球体を意味することばです。やがて地球をさすことばとして使用されるようになり、さらに「地球規模」「全世界規模」という意味合いで使われるようになりました。情報通信技術の飛躍的な発達によって、政治・経済・文化などのあらゆる分野で、「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」が自由に国境を越え、瞬時に移動するようになっています。

当たり前の話ですが、みなさんが手に握っているスマホも、インターネットを通じて世界中とつながっています。その気になれば、一個人が、世界中の人々に向けて自由に情報発信できる時代となったのです。そうした動きをグローバル化 (globalization) と呼び、グローバル化が進んだ社会をグローバル社会 (global society) と称しています。

Q 政府や産業界、大学がグローバル人材の育成を熱心に説いていますね。なぜですか。

A 人口減少、超高齢化、大震災、新興国との経済競争といった危機から日本が立ち上がり、再び経済成長を遂げるためには、日本企業のグローバル展開を支える人材 (human resources) が必要だからです。各大学では、そうした産業界のニーズを踏まえた教育プログラム改革を次々と行っています。

Q 政府や産業界がめざすグローバル人材について教えてください。

A 首相官邸に置かれたグローバル人材育成推進会議では、グローバル人材のコンセプトを以下の3点にまとめています (2011年6月)。

- ・要素Ⅰ： 語学力・コミュニケーション能力
- ・要素Ⅱ： 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- ・要素Ⅲ： 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

このほかに、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと (異質な者の集団をまとめる) リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等が求められるとしています。

こうした力は、授業や学校行事、部活動、キャリア教育、ボランティア活動等の従来の教育活動でもはぐくまれていくものですが、さらにグローバル人材育成に特化した特別プログラムを用意した高校が、いわゆるスーパーグローバルハイスクールです。

Q 国際舞台で活躍するグローバル人材は確かに必要だと思うのですが、少子高齢化や産業構造の変化によって弱体化していく地方はどうなってしまうのでしょうか。

A グローバル化の波は中小企業にも確実に押し寄せています。グローバル人材育成は、地方の企業にとっても必要不可欠です。TPPのような国際経済の動きに対応した新たな産業、増え続け

る訪日外国人客をとりこむための観光産業など、地方ならではのグローバル戦略を考える必要があります。

また、少子高齢化、過疎化、産業衰退といった深刻な危機は、単に日本の地方社会の問題にとどまりません。近い将来、中国や韓国、台湾、ASEAN諸国といった隣国に次々と起こる問題でもあります。日本各地の自治体や地域住民、企業が力を合わせて地方再生に成功したら、世界に向けた素晴らしいモデル提示となりますね。現在、総務省では、ICT超高齢社会構想会議を開催し、モデル構築とその全国展開を推進しているところです。医療や福祉、行政、教育、環境対策、ボランティア活動といった諸分野が大きくかかわる活動です。

グローバル人材の育成は、岐阜県や中濃地区、関市の将来にも必要不可欠です。

Q ビジネスだけではなく、医療や福祉、教育、行政の分野も深く関わるのですね。理工系をめざす生徒、基礎科学や人文系の学問に関心のある生徒にとってはどうでしょうか。

A 国際ビジネスの分野で活躍できる人材に必要な資質や能力を養成するためには、ビジネス以外の様々な分野に意欲的に取り組むことが必要ですし、時代の変化に対応するためには学問や人材の多様性が不可欠です。今すぐに役立つか、役立たないか。文系か理系か。そのような旧時代的な枠組みは壊れつつあります。

たとえば財界を代表する経営者団体・経団連（日本経済団体連合会）は、グローバル人材育成のために「科学技術立国日本への理解に向けた理工系教育」を提言し、理工系教育の充実を図ると同時に、文系学生にも産業技術や科学技術への理解を深めてもらうことが大切であると説いています。さらに、多様な経験を積み見聞を広める手段としてのボランティア活動や、歴史や哲学などを含む幅広い教養（liberal arts）をはぐくむことも奨励しています（2011年6月）。

財界トップも認めるとおり、文理の枠にとらわれない幅広い教養や、知的探究を旨とする基礎的学問、打算を越えたボランティア活動等が、グローバル人材の育成には不可欠です。

Q グローバル人材育成について、大学の先生はどう考えているのでしょうか。

A 独創的な研究やユニークな人材育成で知られる京都大学の山極壽一総長は、グローバル人材について次のように述べています。（「京大式 おもしろい勉強法」朝日新書2015）

「モノにしても、人にしても、交流は多岐にわたっている。昔に比べたら、考えられないほどの勢いで、多様な物が私たちの目の前を通り過ぎていきます。（略）それだけ多様なものが選択できるようになったということは、便利で自由度が広がった一方、その都度さまざまなものに対応していかなければならなくなったということです。つまり、多様なものを認めつつ、自分というものをきちんと持っていないといけない時代をすでに迎えていると言えます。私は、それこそが重要なグローバル人材の素養だと思います。多様なものの存在を認めつつ、それを自分にうまく合わせつつ、なおかつ自分を失わずにすることができる人間。こういう素地は対話力のなかから鍛えられます。いろいろな人と会い、同調しながらも、自分が信じている、あるいは自分の身にまとっている教養をきちんと表現できる。そして意思決定ができる。自分の考えをそのなかでまとめ上げ、自己主張ができる人間。そのためには自らのアイデンティティをしっかりと持つことです。」

さらに山極総長は、「グローバル人材とは、みんなにおもしろいやんと言わせる人」と定義しています。柔軟に他者を受け入れつつ、自己を鍛えて表現する。まわりを「おもしろい」と思わせ人を動かす対人力を身につける。山極総長の発想は、日常生活の中でも生かせそうですね。

Q 英語に対し、どのように接していくべきでしょうか。

A グローバル人材にとって、英語の活用能力は不可欠です。

政治や経済はむろんのこと、学問や文化、芸術の分野でも、国際言語としての英語の優位性には動かし難いものがあります。自国の言語や歴史に強い自負を持つフランスやドイツ、中国のトップレベルの大学でも、授業で英語が使用されるようになってきていますし、英語圏の大学教育がモデルとして取り入れられています。

その一方で、英語で何を表現するのか、伝達する中身も問われます。

一例を挙げましょう。エドワード・ヴィッカーズ准教授（九州大学）は、「日本の大学は、英語による東アジア研究のプログラムを充実させ、世界に発信すべき」と説いています（朝日新聞朝刊 2015/11/12）。「せっかくの高い研究水準を英語で世界中に発信しなければもったいない」との指摘です。

東アジア研究以外にも、日本人が英語で発信すべきテーマは、環境、先端医療、少子高齢化、防災など数多くあります。いずれのテーマにも、世界各国の大学や研究機関が強い関心を寄せています。関高のSGH課題研究は、知識を広げて思考を深め、さらに英語で発信するプログラムです。英語力をしっかりと身につけ、関高生の力で、世界の人々を「おもしろい」と言わせてみたいですね。

Q ズバリ教えてください。関高校でグローバル性は身につくのでしょうか。

A もちろんです。関高校はグローバル人材育成のために、4つのプログラムを用意しています。

その1 全員で取り組む課題解決型研究

1年生では身近な地域の問題を、2年生では地球規模での問題を取りあげ、課題解決に向けた研究にグループで取り組みます。また、日本語（1年）や英語（2年）で研究成果のプレゼンを行います。

その2 国際交流、リサーチツアー、実践活動

英国の姉妹校ヘイドン校やベトナムのファンボイチャウ高校との交流、大学や企業と連携したリサーチツアーやセミナー、地域やNPO法人と連携したボランティアなどの活動を、希望者対象に行います。

その3 新時代に対応した新しい学力の養成

課題解決型学習課題発見・解決力、コミュニケーション力、表現力、語学力。大学や実社会で求められている新しい学力を、授業やSGH活動を通じて身につけます。

その4 一人ひとりの進路実現、まずは大学受験から

世界にはばたくグローバル人材。地域を支えるグローバル人材。大学・企業・地域との連携を深めつつ、21世紀型の人材育成を目指します。まずは第一関門としての大学進学。授業や進路指導、SGH活動を通じて高い学力とキャリア意識を養成し、一人ひとりの進路実現を目指します。

小中学生のみなさん。関高で、世界にはばたく人材、地域を支える人材をめざしませんか。